

# 子どものことばと生活世界：接続期の中間性に 注目して

寺崎 恵子

## はじめに

現代の学校教育論議に、異校種間連携と接続 (articulation) の課題がある。それは、西欧19世紀学校教育論から続く古くて新しい課題である。

「小1プロブレム」や「中1ギャップ」そして「高1クライシス」など、各学校段階の初年次における問題が指摘されてきた。進学という段差経験と環境移行<sup>1)</sup>に伴う問題に対応すべく、校種間の連携が進められ、接続期に相応しい教育課程が編成され、実践研究と議論が積み重ねられてきた。

これらの議論の要は「ことばの教育」にある。たとえば、保幼小の連携と接続に関して、国立教育政策研究所の調査結果は、幼児期の教育実践における「言葉と文字」と「活動」のあり方について、質的改善の必要を指摘している<sup>2)</sup>。また、小中連携と接続では、児童と生徒の言語能力向上を図るための、国語(母語)教育と外国語(英語)教育とが連関する学習指導のあり方が課題である<sup>3)</sup>。異校種間の連携と接続では、学習生活環境の移行に伴う言語発達の状況を把握する必要がある。

本稿は、この課題について、フレーベルの媒介学校構想を確認して、考察する。発達段階説に基づく彼の教育実践構想では、幼児期と少年期の特性がことばの差異に把握されている。これは、幼児期の教育を学校教育の始まりであり基礎であるとする現代の教育の課題に通じる。それをふまえて、接続期にある子どもの生活世界の交流活動をカルタ遊びにみて、ことばの発達の過渡的状況をあわせて考察したい。

## 1. 節目にある子どもの経験

学校教育論と発達論は段階説で理解されている。学校教育では、発達段階に合わせて教育課程を編成している。学校教育の段階を一つ上に進むと、順調な発達とともに子どもの能力が一段上に高ま

るように捉えられる。

段階説の下地には、人生の諸時期を「人生の階段」に表す多くの図版があったと考えられる<sup>4)</sup>。子どもから大人に成長する人生前半は、左下端から右上に続く階段を上る。成人以後を人生後半とする老いの過程は、最上段から右下端へと階段を下りる。誕生に始まって死に至る人生の一巡は、左から右への時間経過の横軸上に積み上げられた階段を向上して向下する図に表された<sup>5)</sup>。各段には、諸時期の特徴を表す人物像が年齢区分とともに描かれた。「人生の階段」は、それ以前にあった車輪や樹木の図に表された人生の一巡<sup>6)</sup>や四季に表された人生の一巡とは異なる人生観である。

発生・発展・発達 (development) は、包みを解いた状態を原義とする。それは、内包されていたものの発現である。段階説は、自然物の生長という連続的な変化の過程に時間区分の節目を入れて、発達の事象を観察可能にした。一定期限での変化の量を計測して、発達の度合いの評価を可能にした。そして、発達に適切な環境づくりやはたらかかけの計画的な実施を可能にした。望ましい方向への順調な伸長と目標達成の実現がかなえば、自然な発達の有用性が明らかになる。

発達段階説にもとづいた学校教育の制度と実践は、子どもという自然な存在に、順調な発達を期待する。子どもは、学習を積み重ねて、力の獲得と蓄積と発揮によって目標を達成し、段階を進む。大人は、学習環境を整えて、ステップ・アップを応援する。各学校段階には修業年限<sup>7)</sup>があるので、始期と終期である入学と卒業は、「これまで」と「これから」のあいだの節目 (articulation) になる。子どもの発達の状況が気になってくる時期に入る。目標の達成度に加えて、段差・障壁を乗り越えて次の段階に移行するための力量が明らかになる<sup>8)</sup>。発達は、どこか無機的になり、本来の発達・発生の有機的な生動性は、発達段階の陰に潜む。

幼児期から児童期のあいだの発達の節目は、「5歳の坂」に把握される。池畑美恵子によると<sup>9)</sup>、発達の節目は、思考のことばの躰きと学習の躰きが連鎖する実情に捉えられる。子どもの言語活動は、話しことばを主とする生活言語から読み書きの習得に関連する学習言語へと移行する。その段差・障壁は「9歳の壁」とされる。「5歳の坂」に感じられる困難は、学習言語への移行以前の、生活言語の獲得と活用の不充分さに起こる<sup>10)</sup>。したがって、5歳ごろの発達の節目にある子どもには、生活言語をより豊かにする環境が必要である。身近な事物への子どもの興味関心と感性が、生活言語・話しことばの言語活動に充分に開かれる。その上で書きことばに結びついてくる。

幼小連携と接続は、ちょうど子どもが発達の節目にあるときに重なる。「社会的な有能性を高めること（発達）とともに、生命性を深めること（生成）の2つの次元」でとらえるとき<sup>11)</sup>、生活言語・話しことばの多様性と重層性が注目される。つまり、節目のときこそ、子どもの生活経験と言語活動の結びつく状況への注目が必要である。

## 2. 発達の中間性と媒介学校

フレーベルの教育論は、子どもの発達段階をふまえた学校教育論を基本とする。少年期にある子どもの発達には、学習学校の教育がふさわしい。けれども、幼児期にある子どもの発達には、幼児学校の環境はふさわしくない。彼は、学習学校に対して、遊びを通した保育（Pfleger）の場として幼稚園を創始した。幼稚園（Kindergarten）に、土を耕し生を養うことの必要、つまり、発達を人間の成長と植物の生長との連関に把握していたことが表れている。実際に、幼稚園では、庭づくりと植物の栽培が子どもと大人との協同で行われた。

彼は、少年期に対して幼児期を、学習学校に対して幼稚園を、発達段階の質的差異において捉えていた。幼児期から少年期への過渡期は、子ども期の「第三の主要な段階」とされた。そして、「幼

稚園と純粋な学習学校との連結である媒介学校あるいは予備学校（Vermittlungs-oder Vorschule）」が構想された<sup>12)</sup>。幼稚園と学校の中間にあって、両者の教育を媒介し、接続する教育の場である。そして、媒介学校の指導者になるための養成課程（一年間）が構想された<sup>13)</sup>。

湯川嘉津美によれば、わが国の学校教育における幼小連携と接続の課題は、フレーベルの媒介学校構想から続いている。1876（明治9）年の東京女子師範学校附属幼稚園創設以来、連携と接続の課題は、小学校との連絡問題とされた。1881（明治14）年には、幼稚園の最上級「一之級」を「接続級」として、小学校の教育課程との共通化がはかられ、幼稚園で就学前の準備教育が行われるようになっていった<sup>14)</sup>。

20世紀初頭に、幼稚園教育と小学校教育の連絡に関する問題が再燃した。フレーベルの教育論を原理的に把握した米国の進歩主義教育の実践から、幼小の連絡は、両者の系統性をとらえた。発達の連続性をふまえた統合的な教育方法として、プロジェクト法が学ばれた<sup>15)</sup>。明治・大正期の学校教育は、幼小の連携と接続の課題を把握していた。古層には、フレーベルの媒介学校構想があると考えられる。

フレーベルは、遊びを主とする幼稚園と学習を主とする学校との中間にあって、両方の教育の本質をもつ媒介学校を構想した。子どもの思考は、生活体験の事実直観（幼児期）から学習経験の抽象的な概念によるもの（少年期）へと移行する<sup>16)</sup>。媒介学校にあるとき、直観から概念へと移行しながら両者を結びつけて、対立する事物対象を「媒介的なものとして考えて理解する」ようになる<sup>17)</sup>。

思考の対象が対立する事実を、相対する二者のあいだの隔たりに捉える。ところが、移行期にあるとき、「統一に個性が、個性に多様性が、外的なものに内的なものが、可視的なものに不可視的なものが、単純なるものに複雑なるものが、運動に静止が、全体に部分が…対立し、また逆も同

様である」<sup>18)</sup>。前者と後者のあいだには、双方向の可逆性が成り立つ。こうした思考は、二者のあいだの隔たりに両者の交叉を捉えるものである<sup>19)</sup>。具体的な事物と抽象的な概念との対立を両者の可逆性に捉える。これが「媒介的に理解する」ことである。「特殊なものが一般性にまで、外的な個別直観が内的な総理解に高められる」<sup>20)</sup>。媒介学校の間接性は、幼稚園と小学校のあいだの双方向的な可逆性、つまり、隔たりと交叉にある。

「媒介的なもの」は、ことばの発達にも起こる。「言葉の直観と理解」は、「母語の基礎的な音声言語と文字言語の全体を含む」。それが、外界の観察（とくに植物界、樹木の世界への注意と観察）を通じて可能になる<sup>21)</sup>。この考察を、フレーベルは『人間の教育』（1826年公刊）でも行っている。「自己の内的なものを外的なものにおいて、また、外的生成物を通じて自発的になされる表現が、一般に、言語と称される」。だから、「話す（s-prechen）」は、「事物の分割がこの事物の内面的なもの、最も内にひそんでいるものを明らかにするように、自己を分割すること」であり、「花の蕾の裂開が、この花の内面的なもの、および最も内なるものを明らかにするように、自己の心の中にあるものを自発的に明らかにする」ことである。その最も内なるものとは、「生動的なものであり、生命である」<sup>22)</sup>。

話しことばは、自己の最奥にある自然の本質・生命を発声に表出する。内から外への移行は、その逆も成り立つ。聞こえてくる聲は、内に沈む。ことばの響きは、外と内、上と下、右と左の対立のあいだで交わりあう。生身の自己は、中間的な媒介である<sup>23)</sup>。内的生命と外的生命は、自身という中間において、隔たりにおいて交叉する。そこに、ことばが発生する。

幼児期から少年期への過渡期に対応する媒介学校では、内的生命と外的生命との対立の可逆性に、ことばの発生に立ち会う。話しことばの両義性に、子どもは自己を認識する。母語の響きを最奥をもって、生き生きとことばが発生する事実を、子ども

は直観と概念との隔たりと交叉に、つまり、媒介的に理解することができるようになる。

### 3. 読むことの間接性とことばへの関心

幼児期から児童期への移行期にさしかかって、ことばへの関心が強くなるころ、カルタ遊びを楽しむ様子が子どもの生活に見られる。ことばと絵を合わせる遊びは児童文化財の一つだが、もともとは、子どもの遊びではなかった。16世紀にポルトガルから伝来したカード遊び（carta）に、平安時代から伝承されてきた貝覆（貝合わせ）と歌あそびが合わさって、読み札と絵札（取り札）を組み合わせる日本独自のカルタ遊びになった<sup>24)</sup>。

江戸時代後期に子ども向けのいろはカルタが作られて遊ばれるようになった。絵札には、読み札の諺などの絵解きと見出しの頭文字が描かれた。明治時代になって、学校教育での必要と相まって、カルタは教育玩具として製作され普及した<sup>25)</sup>。カルタはお正月の伝承遊びとして親しまれている。郷土かるたは、学習教材として活用されている<sup>26)</sup>。

カルタ遊びの要は聲にある。カルタのことばは読み札の文字が聲によみあげられ、遊びに転じる。〈ウタ〉性<sup>27)</sup>の強いことばは、周縁的である。読み札をよむ朗々とした調べの明瞭な声に詠まれたことばが遊びの場に響く。そのなかで遊ぶ人たちは絵札を囲む。聞こえてくる聲の響きと絵札に感じられる味わいとを、札を取りに伸びていく手が結び合わせていく。カルタを共に囲み、また対向して、聴きあい、取りあい、よみあうことが重なる。交流の現場にカルタのことばが生きてくる。

埼玉県には、「3つのめばえかるた」がある。これは、幼児期の教育と小学校教育との連携による接続期プログラム作成にあわせて制作されたものである。子育ての目安である「3つのめばえ」（生活、他者との関係、興味・関心）の内容を、遊びの交流を通して意識し、自覚するようになることを主旨としている<sup>28)</sup>。郷土かるた<sup>29)</sup>の手法を活用して、県内の子どもと大人が制作過程の段階から

参加している。それが、このカルタの特徴である。絵札にも読み札にも、人々それぞれの、新たに小学生になることへの思いや声が込められている。それを一緒に囲んで遊びながら共有するのである。

卒園と小学校入学が近づいてくるころの5歳児（年長児）クラスの3学期の生活に、カルタ遊びの周縁性と中間性は相応しい。「3つのめばえかるた」は、連携・接続の工夫である。「これまでのこと」と「これからのこと」が意識される子どもの生活の節目の実際が、カルタ遊びに重なる。

この時期のカルタ作りも、子どものことばの発達と生活の節目に重なる。今井和子は言う。「思い返してみると私たち大人も子どもの頃は、お正月が日常からかけ離れた格別の“しんぴんな時間”<sup>と</sup>でした。そんな感動をぜひ残しておきたいと思い、私は子どもたちにカルタを作ることを提案しました」<sup>30)</sup>。子どもたちは、この正月が「年長組さん最後」という特に格別なときであることを身に感じている。旧さと新しさが切りかわる「しんぴんな時間」を迎えた感動の〈ウタ〉は、端的である。「㊦っぱいおもち たべたんだ」、「㊦としだま いっぱいもらって ちょきんした」、「㊦れ せんせいにねんがじょうかいた」など、子どもたちの話すことばが文字にされた。一人ひとりの思いが口から聲に出てそれぞれの身から離されたことばが、紙の上書きとめられたことばになった。ことばが移行しながら結びついて伝わり合う。

幼児期の話す声のことばと児童期の書くことばとそれを読むことばが結ばれて移行する。それは、小学校教育の内容を幼児期の就学前教育で前倒しあるいは先取りで行うことではない<sup>31)</sup>。文字を書くことへの関心は「書くことは感動を保存すること」<sup>32)</sup>の生活経験に起こる。佐々木宏子は言う。「子どもは、いま自分の口から出た言葉の数々が書き言葉にされて、ひとつの作品となったものを見る。自分の言葉でよみがえらせた表象が自分とは切り離された世界（作品）のものになってしまうことを経験する。書くこと（書いてもらうこと）の楽

しさは、自分の考えや思いが言葉によって作品となり、その結果対象化された「じぶん」なるものを発見できるからである」<sup>33)</sup>。話して聴くことばは、文字に書かれて、その時の自分の意見や考えや感動が保存される。読み返したとき、ことばに内と外が交わり、そのときを思い出す。

幼児期から児童期への移行において、子どものことばも過渡的になる。カルタ遊びのことばのように、子どものことばは端的で多様で重層する。ことばの発生・発展・発達は、複雑である。この媒介的なことばの状況に、大人は参加する。その要は、子どものことばを「大人に書いてもらうこと」にある。文字の読み書きを学ぶ前の子どもは、それをよむ。三木成夫が正月のカルタ遊びの子ども声を取り上げて述べるように、そのたどたどしい声は、ヒビキ、つまりくはらわたの声であり内臓の感受性である<sup>34)</sup>。ことばの生成と発生としてのことばの発達は、カルタ遊びの交流の場において、生身の子どもの、からだじゅうの、内と外の媒介的なことばにみえてくる。

## おわりに

幼稚園教育要領の改訂が、平成29年3月に告示され、平成30年度から施行される。幼児期から児童期への移行期における発達の状況をふまえた教育のあり方が、喫緊の課題である。それは、これまでに議論されてきた幼小連携と接続の課題に連なりながら、新たな局面での課題である。

「幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」」（第1章総則 第2）が明記された。子どもがことばを用いて経験したことや感じたことそして考えたことを表現すること、豊かなことばや表現を身につけること、またことばを用いて心を通わせる伝え合いを楽しむことが示されている。

ことばは、コミュニケーションの手段であり、思考の道具である。それは確かである。けれども、発達が目標の達成に向けた能力の発揮であるとき、

より完全であることを目指して段階を向上することにあるとき、ことばは無機的になる。聞こえてくる響きがかたばであるとも分からずにいたころのことや、ことばがわたしに生まれたときのことを、忘れてしまった。ことばを駆使しても、なかなか伝わらないことも、よくある。

フレーベルは、子どもたちに生きようと唱えた。彼が、ことばの発生・発声に注目したのは、ことばが生きることの源泉を、自身の内奥と子どもとの交流とを、媒介において捉えようとしたことではなかっただろうか。

## 注

- 1) 山本多喜二、S. ワップナー編『人生移行の発達心理学』(北大路書房、1992年)。これは、生涯発達論として、「有機体発達論」にもとづく危機的人間-環境移行 (critical person-in-environment transition) 論である (同、25頁)。
- 2) 『幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究 (報告書)』(国立教育政策研究所、2017年)、136-139頁。「教師自身の語彙が必ずしも豊かとは言えない状況」「教師によって必ずしも絵本の重要性が認識されていない」「(印刷 (書かれた) 文字に親しむ環境について) どのような取組が望ましいのかを検討する必要がある」「遊びを媒介とした子どもと教師の言語的関わりが豊かに展開していきづらい」とある (同書、138頁)。
- 3) 鳥飼玖美子ほか「自立した学習者を育てる英語教育の探究 小中高大を接続することばの教育として」(中央教育研究所 2015年報告)。[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo/3/056/siryo/1367879.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo/3/056/siryo/1367879.htm) 【2017年9月5日確認】
- 4) 網野善彦ほか編『人生の階段』(福音館書店、1999年)、240-251頁。「人生の階段」は、19世紀中ごろまで約3世紀のあいだ、西欧で伝承されていた。
- 5) 熊野観心十界図では、太鼓橋を右下端から左へと上り、左端へと下る。歴史性・物語性の時間経過の方向と文字を書く方向との関連が推察されている (網野ほか、前掲書、247頁)。また、小嶋秀夫による生涯発達論も、「人生の階段」から考察を重ねている (小嶋秀夫『心の育ちと文化』(有斐閣、2001年)、126-129頁)。
- 6) Sears, E., *The Ages of Man ; Medieval Interpretations*, (Princeton University Press, 1986) 141-151, 153-155.
- 7) コメニウス『大教授学』(1767年)の修業年限の話題は、その後の学校教育観に影響を与えた (北本正章「人生の諸時期」の伝統と子ども期の年齢に関する比較教育社会史的考察『教育人間科学部紀要』第1号 2010年、102頁)。
- 8) 卒業・入学は、イニシエーション論が明らかにしたように、関 (liminality) を渡る〈死〉と〈再生〉である。無の状況の生成の過程は、自己形成過程における自覚のときになる。
- 9) 池畑美恵子「学齢期発達障害児の学習支援の焦点化-「5歳の坂」「9歳の壁」の視点からみた言語概念形成を中心に-」『淑徳大学社会福祉研究所総合福祉研究』21 2016年。
- 10) 池畑美恵子、同上、243頁。
- 11) 矢野智司「生命性と有能性の教育に向けて」『円環する教育のコラボレーション』(教育学研究科教育実践・コラボレーションセンター (京都大学)、2013年) 16頁。
- 12) フレーベル「媒介学校-かれの一女子生徒にあてたフリードリッヒ・フレーベルの書簡- 1852年5月25日、マリエンタールにて」『人間の教育 幼児教育論』世界教育学名著選8、岩崎次男訳 (明治図書出版、1973年)、62-63頁。
- 13) 同上、69頁。
- 14) 湯川嘉津美「幼稚園と小学校の連携・接続をめぐる歴史的考察 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議 (第4回) 平成22年5月6日「資料2」<[http://mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/syoutou/070/shiryo/\\_icsFiles/afiedfile/2010/07/14/1294436/pdf](http://mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/syoutou/070/shiryo/_icsFiles/afiedfile/2010/07/14/1294436/pdf)> 【2017年9月5日確認】
- 15) 橋本美保「幼小連携とプロジェクト活動-教育情報の伝達とその困難」田中智志ほか『プロジェクト活動-知と生を結ぶ学び』(東京大学出版会、2012年)、93-116頁。
- 16) フレーベル、前掲、68頁。
- 17) 同上、80頁。
- 18) 同上、79頁。
- 19) V.ターナーの間論に近い。V. Turner, "betwixt and between: The Liminal Period in Rites of Passage", *The Forest of Symbols: Aspects of Ndembu Ritual*, (Cornell U.P., 1967), 93-111. 寺崎恵子「初年次教育の中間期を渡る」『FD Newsletter』No.14, (聖学院大学、2014年)、3-5頁。
- 20) 同上、80頁。
- 21) フレーベル「人間の教育」1、前掲書、83-85頁。
- 22) 同上、195-196頁

- 23) フレーベルの話しことば論(同上、200頁)については、稿を改めて考察したい。
- 24) 大牟田市立三池カルタ記念館監修『カルタ-PLAYING CARD』(文溪堂、2006年)。
- 25) 同上書 10頁。また、「いろはかるた」(斎藤良輔)『日本大百科全書(ニッポニカ)』小学館(Japan Knowledge)。
- 26) 郷土かるたは、群馬県「上毛かるた」(1947年)を始まりとする。かるたを通して、郷土の歴史と文化を伝え、学ぶことに主旨がある(久保田福美「「上毛かるた」と社会科教育:教材としての「かるた」の意義と役割、有効性について」『学習院大学文学部研究年報』61、2014年)。
- 27) 〈ウタ〉については、藤井貞和『物語文学成立史-フルコト・カタリ・モノガタリ』(東京大学出版会、1987年)を参照して論じた(寺崎恵子「ルソーにおける自然言語論と子どもの言葉」『聖学院大学総合研究所紀要』62号、2016年)。
- 28) 埼玉県教育委員会『接続期プログラム ~幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を目指して~』(平成24年3月)、4頁。
- 29) 「さいたま郷土かるた」(昭和57年)ならびに「彩の国21世紀郷土かるた」(平成14年)。埼玉県の郷土かるたは、前述の「上毛かるた」を参考にして作られている。寺崎恵子「埼玉県のカルタ遊び」埼玉新聞「経世済民」(2015年1月20日)。
- 30) 今井和子「思い出のカルタづくり」『母の友』728号(福音館書店、2014年)、6-7頁。
- 31) 「資料14 教育課程部会幼児教育部会(第6回 平成28年3月30日)における主な意見(未定稿)」に、小学校教育との接続に関する懸念事項が記されている。<[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1369709htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1369709htm)> 【2017年1月5日確認】
- 32) 今井和子、前掲、7頁。
- 33) 佐々木宏子「読むことのおもしろさ、書くことの楽しさ」『児童心理』44-3(金子書房、1990年)、117頁。
- 34) 三木成夫『内臓とこころ』(河出書房新社、2013年)、144頁。

(てらさき・けいこ 聖学院大学人間福祉学部児童学科准教授)